農業公園内に設置された市民農園の評価

－従来の市民農園との比較を通して－

Evaluation to the Allotment Garden Located in the Agricultural Park

- Through the comparison with a general allotment garden -

三宅康成* 松本康夫**

*Yasunari MIYAKE **Yasuo MATSUMOTO

(*姫路工業大学環境人間学部 **岐阜大学農学部)

(*School of Humanities for Environmental Policy and Technology, Himeji Institute of Technology

**Faculty of Agriculture, Gifu-University)

I はじめに

現在開設されている市民農園は、農地を区画割りしただけの形態が大部分を占めている。都市近郊や農山村地域では、休憩所や宿泊施設等を備え、農園周辺と一体的に整備した新しい形態の市民農園も見られるようになってきている。すなわち、施設の整備水準の高い市民農園が開設される傾向にあると言える。

ところで、愛知県安城市に開設された市民農園は、これらの動きとは異なる形態の市民農園として注目される。一般的には、市民農園そのものが単独で立地しているのに対し、本事例では、農業公園^①内の一角に市民農園スペースを設けている。注目すべき点は、①入場料が必要な施設と一体的に整備されていること、②各地で取り組みが見られる大規模な農業公園の中に開設（内包）されていることである。他の施設に付帯する形の農園としては、従来から都市計画サイドで行われてきた都市公園施設としての分区園があり、1956年から都市公園法の中に位置づけられている。公園の一施設としての位置づけは同じであるが、入場料を必要とする本事例とは性格を全く異にするものである。

本論では、農業公園内に設置された新しい形態をとる市民農園の特徴を明らかにし、従来の市民農園との比較考察を行いながら、本タイプの市民農園の意義と課題を検討した。

II 市民農園の存在形態

市民農園の存在形態を概観すると図1のようにまとめられる。それぞれの特徴は以下に示す通りである。

A：市民農園が単独で立地するもの

B：市民農園に他の施設が隣接するもの

C：市民農園内に他の施設が立地するもの

D：他の施設の中に市民農園が立地するもの

Aのタイプは農園単独で存在するもので、現在開設されている農園の大部分を占めている。単に農地を区画割りした形態から、休憩室、広場、倉庫、トイレ、宿泊施設等の整備水準を高め付加価値を持たせたものまで多様である¹⁾²⁾。B、C、Dは本来の市民農園の機能に他の機能を抱き合わせて多機能化を図ったものである。Bは例えば公園、各種体験施設、集会所などの公共施設等に隣接させたものである。Cは農園の区域内に市民農園以外の目的を持つ施設（集客施設）を設けたもので、観光農園^②が代表例である³⁾。Dのタイプの農園は、他の施設の中に市民農園を位置づけるもので、農業公園や都市公園が代表例である。公園として明確に境界線を引いたものとそうでないものが考えられる。本論で検討する事例はこの形態ではあるが、前者に属している。

開設数からみれば、Aの形態が大部分を占めているが、近年、B、C、Dのような形態が見られるようになり、市民農園の多機能化の動き

に拍車がかかっている。ただし、これらは基本的な形態を単純化して示したものであり、実際の事例では複合的な形態も考えられる。

図1 市民農園の存在形態

Ⅲ 農業公園および市民農園の概要

1 立地条件

市民農園が所在する安城市は愛知県のほぼ中央に位置し、名古屋から約30kmの距離にある。明治用水の豊かな恵みを受け、多角的な農業経営を推進したため「日本のデンマーク」と称されている。農作業の大型機械化、地域営農システムを取り入れて、経営規模の拡大を図るなど、都市近郊農業の先進地としての評価は高い。一方、名古屋市の通勤圏にある恵まれた立地条件から、JR 東海道線、新幹線、私鉄の沿線を中心として急速に都市化が進行しており、宅地開発によって人口の増加が顕著である。開設場所はJR 安城駅から約15～20分の距離の都市近郊農村にある。公園が開設された場所は、農振法による農業振興地域に指定されているが、市街地から至近の距離にあるため、都市化圧力が高い地域でもある。

2 公園の概要

農林水産省の補助事業によって1993年度から建設が開始され、1997年に開園した。第3セクター(財)安城都市農業振興協会が管理・運営にあっている。公園の総面積は13.1haであり、図2に見るように温室、マーケット、レストラン、クラブハウス、市民農園等がある。入場料は大人600円である。開園時間は午前9時～午後5時までで、週1回(月曜日)が休園日となる。入場者は初年度にあたる1997年度は約120

万人、1999年度は約73万人であった。

図2 公園の平面図

図3 市民農園の平面図

3 市民農園の整備状況

図3に市民農園の平面図を示す。農園には1区画20㎡の農園が野菜コース45区画と花コース15区画の計60区画ある。利用者は野菜コース、花コースのどちらかを選択できる。その他の施設は農機具小屋(約20㎡が4棟)、ハーブ園

(約 20 m²)，モデル庭園(約 20 m²が 5 区画)，展示農園(野菜・花・ハーブそれぞれ約 20 m²)，ちびっ子農園(約 120 m²)，トイレ，園芸プラザ(休憩施設)がある。利用料金は年間 20,000 円で，利用者の応募は年に 1 回行われ，安城市の広報による。応募資格者として日常の農園管理ができ，講習会に出席可能であることとしている。1997 年度，1998 年度ともにすべての区画が利用されており，1999 年度は定員の 1.5 倍の応募があった。利用期間は，4 月から翌年の 3 月の 1 年間(連続 3 年までの更新が可能)である。利用時間は公園の開園時間であり，休園日及び営業時間外は利用できない。市民農園の契約者には 1 年間有効な入園パスポート(家族会員 4 名まで入場可)が 2 枚ずつ配布されている。

IV 農園の特徴

1 設置の動機及び管理・運営内容

市民農園の設置動機に関する全国の統計⁴⁾を図 4 に示す。農園供給側から見ると，農地の有効活用，村おこし・地域の活性化を目的とした回答が高い割合を占め，需要側からは農作業体験への欲求，農業に対する理解，健康増進・生きがい対策を目的として設置を行ってきている。一方，本事例の場合も同様に①農作業の楽しさを学ぶ場，②日々の生活に憩いと潤いを与える場，③家族のコミュニケーションを図る場，④健康増進の場といった目的が設定されているが，それに加えて⑤家庭での栽培を前提として，作物の栽培方法を学ぶ場という開設者の意図があり，他の市民農園では見られない目的設定がされているのが特徴である。利用者が市民農園で得た体験を実際に自分の土地で活かすことをねらっているのである。従って，市民農園の利用者が初心者であることを前提に農園の管理・運営内容が決められている。

農園の管理・運営はクラブハウスに在駐する職員が統括する。区画の管理は担当する農作業経験者 2 名を雇用し，農園に常駐させている。すなわち，利用者が不在時の区画管理と利用者

への栽培指導を可能にしている。クラブハウスでは月に 1 回のペースで作物の栽培や病害虫防除に関する専門家による講座と実習指導が行われている。また，週 1 回(日曜日の午前中)相談窓口を開き，利用者への対応を行っている。

図 4 市民農園の設置動機

注) 市民農園の現状と地域の特色を生かした取り組み事例(1994)から作成

2 利用者の属性および利用形態

利用者・利用形態に関する情報をアンケート調査によって収集した。調査は 1998 年 11 月に郵送方式で行った。利用者 60 名を対象とし，32 通の回答を得た(回収率 53 %)。調査項目は，主に利用者の属性，利用形態，農園に対する評価から成っている。

(1) 回答者の属性等

性別は男性 59%，女性 41%であった。平均年齢 48 歳で，野菜コースが 72%，花コース 28%の内訳である。職業は「会社員」が最も多く 38%，「主婦」が 31%であった。住居の種類は「一戸建て」56%，「アパート・マンション」44%であった。他の市民農園と比較して年齢がやや低いことが特徴であるが，特に顕著な相違は見られない。

農園の選択理由(多重回答)は，「栽培指導があるから」が 81%を占め，次いで「公園内にあるから」44%，「近いから」25%，「他に借りる農園がないから」19%となっている。その他として「水やりをしてもらえるから」，「農機具を借りられるから」等の意見も少数ながら見られた。

農園利用の目的(多重回答)は，「作物を作ること」を学ぶため」が 69%と最も多く，「土と触れあ

うため」59%,「家族とのレクリエーション活動のため」47%,「新鮮な野菜確保のため」31%,「健康増進のため」28%となっている。一般的には土に触れたり、健康増進の項目が多数を占めるのに対し、学習の場として強く意識されている。

(2) 利用形態

利用形態の集計結果を表1に示す。

表1 利用形態

項目	カテゴリー	度数(%)
交通手段	自転車	2(.6.3.)
	自動車	28(87.5.)
	その他	2(.6.3.)
利用回数	週1回未満	1(.3.1.)
	週1回	13(40.6.)
	週1.5~2回	14(43.8.)
	週2.5~4回	2(.6.3.)
	無回答	2(.6.3.)
農園利用時間帯	平日午前	16(50.0.)
	平日午後	8(25.0.)
	平日夕方	2(.6.3.)
	土曜日午前	14(43.8.)
	土曜日午後	8(25.0.)
	土曜日夕方	2(.6.3.)
	日曜日午前	21(65.6.)
	日曜日午後	6(18.8.)
	日曜日夕方	2(.6.3.)
農園滞在時間 (1回当たり)	15~30分未満	3(.9.4.)
	1時間未満	14(43.8.)
	1時間以上	15(46.9.)
特別時間の利用	よく利用した	8(25.0.)
	たまに利用した	13(40.6.)
	利用せず	11(34.4.)
講習会への参加	ほとんど参加	28(87.5.)
	時々参加	2(.6.3.)
	ほとんど参加せず	2(.6.3.)
農園利用以外の 来園回数 (契約期間中)	4回以上	5(15.6.)
	2~3回	11(34.4.)
	1回	5(15.6.)
	なし	11(34.4.)

公園までの交通手段は、「自動車」が88%と大部分を占め、平均通園時間は約15分であった。

農園の利用回数は週1回~2回が最も多く、84%を占めている。週1回未満の利用は1名のみであった。利用時間帯(多重回答)は、「日曜日午前」66%,「平日午前」50%,「土曜日午前」44%の順である。滞在時間は「1時間以上」が47%,「30分~1時間未満」が44%で、特に顕著な傾向は見られなかった。

講習会への参加は、「ほとんど参加している」が88%で良好な結果となった。また、公園開閉

園前後に設けられる特別時間の利用は、「よく利用した」が25%,「たまに利用した」が41%で合わせて66%が利用している。利用しなかった34%のなかには、利用したくても特別時間内でも利用できない有職者も含まれている。

農園利用以外での公園訪問回数は、66%が週1回以上来園している。自由に入出力出来るパスポートの発行によるところであろう。

V 農園の展開に関する考察

農業公園内に設置された市民農園と一般の市民農園の特徴を比較すると表2のようにまとめられる。大きく異なる点は、開設目的、利用条件に関わる項目、栽培指導・区画管理に関する項目である。これらの点について、公園内に設置された農園の意義と課題を以下に考察する。

表2 農園の比較

	本事例	一般の市民農園
存在形態	公園内に存在	農園が単独で存在
開設者	(財)安城市農業振興協会	地方自治体、農協等
開設目的(特徴)	作物の栽培方法の学習	農地の有効利用など
区画面積	約20㎡	15~30㎡程度
区画数	野菜コース45、花コース15 計60区画	50~80区画程度
利用料金	年間20,000円	3,000円~7,000円程度
利用時間	公園開園日の午前9時から 午後5時まで	制限なし
契約期間	1年間	1~2年程度
栽培指導・管理	徹底	ない場合が多い

注) 一般市民農園は「市民農園の現状と地域の特色を生かした取組事例」(農水省統計情報部)の統計値の平均的なものを取り上げた。

(1) 開設目的

IV章で触れたように、本農園では作物の栽培方法を学習する場としての目的が掲げられている。この目的の利用者が69%であったことも指摘した。ここで注目したいことは、開設者はこの市民農園を通過手段として、自宅(家庭)での展開を期待している。すなわち、限られた利用者が何年も継続して利用する農園とは位置づけていないのである。この点は、これまで市民農園に付託されてきた機能・役割に新たな側面を与えるもので画期的である。農地がなくても自宅で簡単に栽培できる花の栽培についてのコースを設けていることにも現れている。

これに対する利用者の意識を見ると、栽培方法の学習に関して、「大変参考になった」、「少しは参考になった」という意見がそれぞれ87%、13%を占め、目的がかなり達成されたことを示している。また、ここで得た経験を自宅で活かすかどうかの問いには、回答者全員が取り組む姿勢を示している。このことは開設者の意図が利用者に認識されていることを示しており、市民農園の効果が農園内だけにとどまらず、地域にまで及ぶ可能性を示唆するもので、興味深い結果と言えるであろう。

(2)利用条件

前述のように、本農園の最大の特徴は、農園が入場料を必要とする大型テーマパークという仕切られた空間に設置されていることである。このことは、利用形態に大きな影響を与えている。すなわち、利用者が①農園利用時間に制限があること、②公園の施設を自由に利用できること、の2点が特徴的である。一般的な市民農園では、利用時間は実質上制限はない（規約では日の出から日の入りまでとすることが多い。）のであるが、本事例では原則として公園の開園時間帯に合わせざるを得ない。このことについて、33%の利用者が利用が困難であることを指摘している。農園側は夏期に特別時間を設けて、公園閉園前後に農園の利用を可能とする対応策をとった。表1でも示したように、結果として66%の利用者が特別時間帯の利用を行っており、時間的な制約に対する措置が必要なことを裏付けている。利用時間に対する利用者の意向として、「時間の延長」、「延長期間の拡大」を望む割合はそれぞれ36%、23%を占めており、今後の課題として検討が必要である。

利用条件に関する利用者の評価を表3に示す。市民農園利用者の公園施設の利用は自由であり、この点は本事例のメリットである。実際には、温室やマーケットはある程度利用されているのに対し、食事施設はほとんど利用されていないことがわかった。マーケットでは植物の種や苗を購入できることも利用を促している。

一方、公園来場者が市民農園内に自由に立ち入ることも可能である。一般の市民農園でも部

外者の立ち入りは空間的には可能であるが、実際には通りを通過する際に目に触れる程度で、大きな相違点となっている。この点については、「やりがいがある」が72%であり、「やりにくい」の16%を大きく上回る結果であり、公の場にさらされることによって利用者の栽培意欲が向上している点は見逃せない。

区画面積は他の市民農園と比べて特に大きな違いはない。近年の市民農園の区画は拡大する傾向があるが、むしろ小さめの設定であると言える。80%以上が適当であると考えている点からも、栽培方法の学習の場としてこの程度の面積で十分であると理解できる。また、利用料金は年間2万円と高めの設定である。

この価格は都市近郊の施設整備が進んだ農園で設定されている水準であるが、これらの農園は1区画の面積が30～50㎡と大きい場合が多く、単位面積当たりに換算すると本事例は高く設定されていると言えよう³⁾。にもかかわらず、70%以上の利用者は適当であると考えている。農園の設備そのものの良さに加え、公園の他の施設の利用が可能となる点や以下に述べる栽培指導や農園の管理が徹底して行われている点などが評価されている結果であると推察される。

表3 利用条件に関する利用者の評価

項目	カテゴリー	度数(%)
区画面積	適当	26 (81.3)
	不適当	6 (18.8)
利用料金	適当	23 (71.9)
	不適当	6 (18.8)
	無回答	3 (9.4)
公園来園者の影響	やりがいがある	23 (71.9)
	やりにくい	5 (15.6)
農園利用の効果	土と触れあうことができた	22 (68.8)
	健康になった	4 (12.5)
	生きがいを持てるようになった	8 (25.0)
	家族のコミュニケーションが増えた	14 (43.8)
	作物を作ることが学べた	27 (84.4)
	公園施設が利用できてよかった	21 (65.6)
	特になし	0 (0.0)
開設目的(栽培方法の学習)について	その他	4 (12.5)
	たいへん参考になった	28 (87.5)
	少しは参考になった	4 (12.5)
家庭での取り組み	あまり参考にならなかった	0 (0.0)
	取り組む	29 (90.6)
	取り組まない	0 (0.0)
	その他	2 (6.3)
	無回答	1 (3.1)

(3)栽培指導・区画管理

先に述べた栽培方法を学ぶという利用目的を

支援する手段として、本事例では栽培指導の強化を図っている。IV章で述べたとおり、公園の職員1名に加え栽培指導員2名を常駐させていることで利用者への密な対応を可能としている。大規模な市民農園を除いて、ほとんどの市民農園では指導員の常駐は稀である。指導員の雇用は、人件費の上昇によって市民農園経営を圧迫するために、多くの農園では実施が困難である。

また、ほぼ月1回の割合で開催されている栽培講習会へは、先に指摘したようにほとんどの利用者が参加しているが、開催頻度、栽培指導内容ともに良好な評価がなされている。

農園の利用頻度は週1～2回程度で特に大きな違いは見られない。区画の管理は開設側も行っており、景観的にも良好に維持されていると言える。区画だけを貸し付ける市民農園では、一般に景観悪化を招いている例が多いが、不特定多数が来訪するテーマパークの一施設として、美観を維持する使命も強く求められるであろう。

VI まとめ

本論は市民農園の多機能化の一つの形態として、農業公園内の一施設である市民農園を取り上げて分析を行った。本事例を通して、このタイプの市民農園の意義や効果が確認できた。一般の市民農園とは異なった基本コンセプトや公園内に設置する必然性を開設者のみならず、利用者も強く認識し、それに合わせた手だてを講じていくことが重要であろう。

農業公園のような大規模なテーマパークは稠密には存在しえない。従って、その一施設として開設される市民農園に対して、従来の農園が果たしている農作業体験空間の量的な供給機能を要求することはできない。また、市民農園の

収益性といった経済的な議論も無意味である。むしろ、拠点的に存在するモデル的な農園として、学習・啓蒙への効果を積極的に評価すべきであろう。この効果は、本来利用者のみならず、利用者以外の農業公園来園者にとっても発現されることが理想であるが、今回は利用者以外の来園者への影響は把握出来なかった。今後の研究課題として残されている。

謝辞：研究の遂行にあたっては、農業公園（安城産業文化公園）の市民農園担当の方々に資料のご提供や調査へのご協力を賜りました。また、データ整理では専攻生の前田健一君にお世話になりました。各位に心より感謝申し上げます。

[注]

注 1) 正式な名称は「安城産業文化公園」である。公園の内容から見て、本論では農業公園と位置づけた。農業公園の定義は明確でない。おおよそ「地域農業振興に関わる総合的な体験・学習施設」と言えるが、詳細は文献5)を参照されたい。

注 2) 観光農園は不特定多数を対象とした主に収穫のみの農園であり、限られた利用者が、主体的に継続して区画管理を行う市民農園とは区別される。詳しくは文献6)を参照のこと。

注 3) 都市近郊地域の施設整備水準の高い大規模な市民農園では、1㎡当たり400～500円程度の設定である。

[参考文献]

- 1) 三宅康成・松本康夫(2000)：市民農園を契機とした村づくりのプロセスと効果，農村計画論文集第2集，pp.73-78
- 2) 東正則(2000)：宿泊型市民農園，東京都農業会議
- 3) 三宅康成・松本康夫(2001)：体験区画を併設した市民農園の実態と効果—岐阜市の市民農園を事例として—，農村計画論文集第3集，pp.37-42
- 4) 農林水産省統計情報部(1994)：市民農園の現状と地域の特色を生かした取組事例，p15
- 5) (財)農村開発企画委員会(2001)：農村整備用語辞典，pp.311-312
- 6) 三宅康成・松本康夫(1996)：オーナー農園を通した都市・農村交流，農業土木学会誌，Vol.64，No.8，pp.41-46

In this research, we clarified the features of the allotment garden in Anjo City in the new form set up in an agricultural park. And, the meaning of the allotment garden with the additional value while doing the comparison consideration with a general allotment garden and the problem were examined. The allotment garden has the following features. 1) Existence in agricultural park where admission fee is necessary 2) Place where master the method of growing crops

As a result of the analysis, it was clarified that the above-mentioned features influence user's use form and the evaluation to the allotment garden. Therefore, it was pointed out that the function which was not able to be demonstrated enough in other allotment gardens like the education function etc. was reinforced, and there was a necessity for adopting the maintenance plan which corresponded to them.